

## *Oliver Twist*

—“fallen woman”の改心とキリストによる救済のヴィジョン—\*

吉田 一穂

### 1. ナンシーについての評価

*Oliver Twist* (1837)は、チャールズ・ディケンズ(Charles Dickens, 1812-70)が救貧院や犯罪などの社会問題を提示したことで成功を収めたが、しばしば主人公のオリヴァー(Oliver)についての人物描写に関して批判にさらされてきた作品である。その主な理由は、人物描写があまりにも平面的すぎ現実味を欠いていることにある。善玉と悪玉を明白に分けることにより、善がどんな境遇に会っても生き残り、最後は勝利するという原理を示したと思ったディケンズの意図が十分うかがわれるが、<sup>1</sup> 一方で後期の作品と比べると明らかに人物描写において見劣りがすると批判されても否定できない側面が作品にはある。

アラン・グラント(Allan Grant)は、「オリヴァーには、個性も子供らしい性質もなく、作品内容の伝達手段にしぎない<sup>2</sup>」と批判している。また、ゴム(A.H.Gomme)は救貧院の悪影響がオリヴァーに見られないことと、オリヴァーが犯罪者層が神聖なものを墮落させる例となっていないことを取り上げた上で、「ありそうもない状況で入ってくる途方もない偶然の一致に人生行路を合わせられ、オリヴァーはディケンズの道徳的目的をなんとか助けている」と批判している。<sup>3</sup>

オリヴァーがこのような批判にさらされている一方、ナンシー(Nancy)はその人物描写において高く評価されている。ウィルキー・コリンズ(Wilkie Collins)は、ナンシーを「ディケンズが描いた最も良い人物」と述べ、ナンシーにディケンズが後に描く女性に見られないような女性らしさを感じとる。ブライアン・マレー(Brian Murray)は、ナンシーをディケンズの初期の小説の中では比較的現実的な登場人物であると評価している。<sup>4</sup> ナンシーの高い評価の理由として、彼女が当時現実にいたタイプの女性であることと、作品の中で唯一変化(改心)する女性であることが考えられる。社会的側面から考えるとフェイギン(Fagin)の住みかに閉じこめられた哀れを誘う売春婦であるナンシーのような女性は、クライブ・エムスリー(Clive Emsley)が「ディケンズは、ナンシーを通りや最も不快な盗賊の住みかによくいる女性として描いた」と述べているように、<sup>5</sup> ヴィクトリア朝時代、犯罪者層との関わりにおいて現実にいた女性である。

ナンシーが作品において初めて登場するのは、第9章においてである。ディケンズは、オリヴァーの目に映ったナンシーを次のように描写している。

**When this game had been played a great many times, a couple of young ladies**

called to see the young gentlemen; one of whom was named Bet, and the other Nancy. Thee wore a good deal of hair, not very neatly turned up behind, and were rather untidy about the shoes and stockings. They were not exactly pretty, perhaps; but they had a great deal of colour in their faces, and looked quite stout and hearty. Being remarkably free and agreeable in their manners, Oliver thought them very nice girls indeed.<sup>6</sup>

外見的には、身なりを整えず顔がとても赤く、いかにも丈夫そうに見える一方、態度は奔放で快いナンシーは、悪党団で女中のような仕事をし、フェイギンの命令によく従う女性である。また、悪党団の使いや身の回りの世話などをするよく気がつく女性でもある。彼女の唯一の弱点は、感情に流されやすく、悪党達に反発したくてもできない気の弱さであった。このような彼女の心を変えるきっかけとなったのがオリヴァーとの出会いであった。ナンシーのオリヴァーに対する同情が始まるのは、オリヴァーが悪党団の一回目の犯罪の後、再び捕らえられ悪党団に連れ戻された時からである。ナンシーは、連れ戻されたオリヴァーに対するフェイギンの暴力行為に猛然と立ち向かう。ナンシーの行為は、彼女の正義感に基づく行為であるが、ディケンズは、悪党の仲間であったナンシーが善の心を持つに至る様を作品の中で描いている。ディケンズがナンシーを感傷的に取り扱ったと充分考えることができるが、ナンシーの心境の変化は、決して非現実的な変化ではない。ナンシーはオリヴァーの半分も年のゆかない子供の時から12年間も食べていくだけの目的でフェイギンの元で奉仕させられてきたのである。そんな彼女がオリヴァーに出会うまで忍耐と抑圧で自分の感情を表に出せなかったのは当然ではなかろうか。そして、彼女が哀れを誘うオリヴァーの出現により心境の変化を来たしたとしても不思議ではないのではなかろうか。

ナンシーは、オリヴァーとの出会いにより、自身の運命と闘う。そして、変化（改心）することにより読者の共感を呼び起こす。本論文では、*Oliver Twist* の中で比較的評価の高いナンシーについて考察することにより、売春婦であるナンシーの改心が作品の中でどのような意味を持つのかを述べたい。

## 2. オリヴァーとの関係

まず、ナンシー改心のきっかけとなる彼女とオリヴァーとの関係について考えたい。ナンシーのオリヴァーへの同情は、彼が悪党団の中で非人間的な扱いを受けていることから生まれる。悪党団の親方フェイギンは、オリヴァーにハンカチをポケットから抜き取る訓練を課し、オリヴァーを犯罪に駆り立てる。オリヴァーは、何も知らないまま老紳士ブラウンロウ(Brownlow)氏へのハンカチ泥棒に加わることになる。実際に泥棒を行ったのは、アートフル・ドジャー(Artful Dodger)なのだが、後に残されたオリヴァーが濡れ衣を着せ

られる。オリヴァーは簡易裁判所に連れて行かれ、法廷で裁判を受ける。結果、オリヴァーは「投獄三ヵ月間」の刑に処せられる。幸いにして、目撃者が法廷に駆けこんでくれたおかげで、彼は不当な処分をまぬがれ、後ブラウンロウ氏の親切な保護を受ける。

しかし、オリヴァーの幸福な生活は、彼がブラウンロウ氏に頼まれ、本と4ポンド10シリングを返しに行く時、途絶えてしまう。オリヴァーはナンシーにつかまえられ、再び悪党達の元へ連れ戻される。悪党達の元へ連れ戻されたオリヴァーは、サイクス(Sikes)とチャーリー・ベイツ(Charley Bates)に本とお金を取り上げられそうになり、自身が悪党団で一生を終えても構わないが、本とお金だけは返してくれと頼むが、その要求は、悪党達に冷たく退けられる。ブラウンロー(Brownlow)氏の家へ逃げこんだと考えたフェイギンがはげしくオリヴァーの肩を打つが、この時ナンシーが現れ、オリヴァーをかばう。「あんたは、この子を手に入れたじゃないか。その上何がほしいのさ、この子に手を出さないでちょうだい。」(115)と言い、フェイギンに立ち向かうナンシーの行為は、彼女の良心に基づく行為であるが、良心につき動かされたナンシーは、サイクスに次のように侮辱されてしまうのである。

**‘You’re a nice one, ‘added Sikes, as he surveyed her with a contemptuous air, ‘to take up the humane and gen-teel side! A pretty subject for the child, as you call him, to make a friend of!’ (116)**

引用の中の‘the humane and gen-teel side’は、サイクスのナンシーへの軽蔑を示す言葉であるとともに、彼の意識の中で、善と悪、紳士と犯罪者層が明確に分かれていることを示す言葉でもある。この言葉はまた、あらゆる人間関係にはそれぞれの道徳律がある、悪党団の中では悪が道徳であるので、悪徳をもって振舞わなければならないことを暗に示している言葉でもある。ディケンズは人間の成長に、いかに環境が密接に関わっているかを示している。

オリヴァーは、街頭での泥棒だけでなく、押し込み強盗にも駆り立てられる。幼い泥棒を利用する方法で最も一般的なものは街頭で盗みをさせることだったが、利用法はそれだけだったわけではない。冷静な頭脳を持ち普通より小柄な少年は、窓格子の間や無防備な小さい裏窓を通りぬけられるくらい体が柔軟であれば、時には堅固な屋敷にしよび込む最高の手段となった。中に入ってしまうと、その子供が仲間の大人のためにドアや錠戸のかんぬきを開けることができる。このような働きをする子供は「スネイクマン」として知られていた。

これは幼いオリヴァーがサイクスの手伝いをするはずだった際の役目である。物語の構成上どんな押し込み強盗でも、オリヴァーに会えばそういう仕事をさせたにちがいない。しかし、ディケンズは細部に至るまであくまでも現実に則して書きたいという気持ちを持っていたため、子供を使うことは次善の策（狙った家の召使いを買収できなかった場合に

のみ用いる) にすぎないことを明らかにし、「煙突掃除のネッドという小僧<sup>7</sup>」がいないのを嘆いているサイクス<sup>8</sup>の姿を描いている。

サイクスは、序文でディケンズが説明しているように、最終的に全く救いがたいほどまでに悪くなってしまった無神経で無情な人物の一人である。一方、マレーが指摘しているように、フェイギンには、罪をあがなうような性質は見られないと指摘する。<sup>9</sup>このような悪党達の性質は、長年犯罪者層として生きてきたがゆえに当然形成される可能性のある性質だと言えよう。ナンシーは、フェイギンに「この子の半分も年のゆかない子供だった時、あなたのために盗みをしたんだ」(116) と言うが、オリヴァーに自身のかつての姿<sup>10</sup>、すなわちしいたげられた子供の姿を見なければ、彼女自身もまた悪徳に染まったままで終わる危険性があったのである。<sup>11</sup>

フェイギンは、有名なユダヤ人の盗品故売人アイケイ・ソロモンズ(Ikey Solomons, 1758-1850)に基づいて作られた登場人物である。ソロモンズは、いくつかの悪党団のための主要な盗品故売人であった。彼は、1831年ニューゲイト(Newgate)監獄に入れられ、ついには、ホバート(Hobart)への流刑に処せられた。彼は2万ポンドもの財産をローズマリー・レーン(Rosemary Lane)の屋敷(ベッドの下の隠し場所)とイズリントン(Islington)のローワー・クイーン・ストリート(Lower Queen Street)の他の住居に隠し持っていた。<sup>12</sup>1816年約200人の子供達で構成された悪党団、人数にすると約6000人の悪党団のメンバーである少年少女がいたと概算されている。<sup>13</sup>

ユダヤ人達は、18世紀後半と19世紀前半犯罪者としてめだつた存在であったが、ユダヤ人達の中には多くのスリや泥棒がいた。<sup>14</sup>ナンシーは、このようなユダヤ人達が作った悪党団(スリ集団)と結託していた売春婦達の一人であると考えられる。<sup>15</sup>ナンシーの生活は、長くロンドンの最も不潔な淫売窟や盗賊の巣窟で空しく費やされてきた。「泥棒の生活よりもよい生活をしたことがなく、泥棒の言葉よりもやさしい言葉を聞いたことがない」(302)と自身について語るナンシーは、ローズ・メイリイに会うことで心境の変化を来す。

第39章で、サイクスを眠らせるため彼のジンにアヘンを入れたナンシーは、ローズとの面会を求めたハイド・パーク(Hyde Park)の近くの旅館に行く。ナンシーは、ローズに自分の行方が知られたら自分が殺されると言う。しかし、危険にさらされているにもかかわらず、彼女はローズにオリヴァーを泥棒にするためモンクス(Monks)がフェイギンに金を与えるようになっていたことを偶然聞いたこと、モンクスがフェイギンにオリヴァーの身元の形跡となるものがなくなったと言っているのを聞いたこと、モンクスが異母兄弟であるオリヴァーをなきものにしたいと望んでいることを伝える。オリヴァーのため危険を冒したことにナンシーの良心を見てとるローズは、ナンシーに泥棒の世界から足を洗うよう勧め、彼女を救い出すことを申し出るが、ナンシーは全ての助けを拒む。「悔い改めと償いに遅すぎることはありません」'It is never too late for penitence and atonement. (305)'とローズはナンシーに言うが、ナンシーはすでに改心して良心に基づいた行動をとっているのである。それでは、なぜ改心したにもかかわらず、ナンシーは悪党団から逃れられないかとい

う疑問が残るが、ディケンズは二つの理由を読者に提示している。

一つの理由は、ナンシー自身が「今となっては、あの人をおいて来ることができないのです。私はあの人を死なせることはできません」(305)と言うように、彼女自身が女性としてサイクスに愛情を感じているからである。もう一つの理由は、悪党団における信頼関係である。ディケンズは、第44章の冒頭で、ナンシーが狡猾なフェイギンも残忍なサイクスも、他の者には隠していた企みを自身には打ち明けていたことを記憶していて、彼らを裏切れないという心境になっていることを説明している。このようにみるとディケンズは、ナンシーの心理描写において人間の複雑な側面を表現していると言える。その複雑な側面とは、具体的には人間関係における **dilemma** (板ばさみ) である。

作品のプロットという観点から考えると、ナンシーはオリヴァーの救済に深く関わっている人物である。オリヴァーの父親は、「家門の名誉や、さもしい心の狭い野心により」(374)結婚することを強られる。最も自然にそむいた結果として生まれたのがモンクスである。後に妻と別れ、オリヴァーの父親はアグニス・フレミング(**Agnes Fleming**)とめぐり合いオリヴァーを宿す。アグニスの妊娠中オリヴァーの父親は、ローマに行き、病気になって死ぬ。オリヴァーの父親が死にかかっている時、前の妻とモンクスが彼に近寄る。前の妻は、財産のほとんどをアグニスとこれから生まれるであろう子供に残すことが書かれてある遺言書を燃やす。モンクスは、自身の母親のオリヴァーとアグニスへの憎しみを受け継ぐ。このような運命からオリヴァーを救い出すのがナンシーである。バートン・ウィーラー(**Burton M. Wheeler**)が述べているように、<sup>16</sup>ディケンズはナンシーを作品の中でオリヴァーを元に戻し、個人的な慈悲が社会の墮落した力から子供達を救わなければならないことを示す人物と定めたと考えられる。しかしディケンズは、ナンシーをオリヴァーを救い出し、社会において個人的な慈悲が大切であることを訴えるための人物とのみ定めたわけではない。時代における売春婦の存在を考慮するならば、ディケンズは、ナンシーの人生に時代における売春婦の人生を描き出すと同時に、売春婦がいかに精神的な面で救われうるかを示したと言えよう。それは、読者にとってはキリストにおける救済のヴィジョンと言っているものだが、それを以下見ていきたい。

### 3. prostitute と改心

ヴィクトリア朝時代人にとって「売春婦」とは、多くの場合犯罪者層の女性を指す言葉であった。売春婦は、ヴィクトリア朝時代において理想的な女性像の完全な否定であった。<sup>17</sup>産業革命後、女性達は次第に家庭の中に囲い込まれていくことになる。公的な仕事や実業の分野は男性の領域となり、女性の領域は家庭ということになっていく。女性は、家庭を守る「家庭の天使」としての役割を期待された。

この「家庭の天使」としての対極にあるのが「転落した女」である。「転落した女」とは、家父長制の規範が求める女性像から逸脱した女である。家庭という女の聖域を守れぬ女、

自制を知らず自らの欲望に負けた女ということになる。愛人や娼婦がそれにあたり、彼女達は社会規範の外に位置づけられた。<sup>18</sup>ただ、注意しておかなければならないことは、女性にできる仕事は数多くあることはあったが、いずれも低賃金で労働条件も苛酷であったため、売春婦の多くがやむにやまらず売春に走った女性だったことはまず間違いないことである。現在では、経済的理由から売春に走るのか、それとも何か心理的・精神的理由があって売春をするのか議論の余地があるところだが、**19**世紀には多くの女性が必要に迫られて売春婦になったことが研究者の間ではほぼ通説となっている。非常に不安定な労働市場で自分の労働力を売らなければならない女性がどんどん増加する一方、賃金は到底満足できるようなものではなかったため、女性達はなんとか現金収入を得る手段をつかみたいと願ったのである。女性の賃金がそれほど低かったということは、雇用者側が、本来女性を養うはずの男性の代わりに、女性を低賃金で雇用したということである。<sup>19</sup>

*Oliver Twist*において、ナンシーは売春婦という点から言うと、「転落した女」ではあるが、悪党団における彼女の役割を考えると、「家庭の天使」としての側面を読者に印象づける女性である。第**39**章にサイクスが病気になり寝こんでいる姿が描かれているが、この場面においてナンシーはとても献身的にサイクスの世話をしている。窓際に坐って強盗のふだん着の一部である古いチャッキに忙しくつぎを当て、夜も眠らぬ看護と窮乏のため、ひどくあおざめ、やせ細っているナンシーの姿は、「家庭の天使」そのものと言ってもいい。このようなナンシーにフェイギンも大きな信頼を置き、秘密の企みも彼女には打ち明けていたのである。ディケンズは、「家庭の天使」としての側面を持ちながらも悪党団から抜け出られないナンシーを描き出している。ナンシーは、ローズに次のように悪党団から足を洗うように言われている。

**‘Think once again on your own condition, and the opportunity you have of escaping from it. You have a claim on me: not only as the voluntary bearer of this intelligence, but as a woman lost almost beyond redemption. Will you return to this gang of robbers, and to this man, when a word can save you? What fascination is it that can take you back, and make you cling to wickedness and misery?’ (306)**

ディケンズは、このように言われながらも悪党団から足を洗うことのできないナンシーを描き出し、人生の方向づけを一定期間続けると後もどりできないところまでくることがあるという人間の傾向を示すとともに、ヴィクトリア朝時代において売春婦が社会的に復帰することが難しいことをも示している。

ナンシーがブラウンロウ氏にモンクスについての情報を教えた後、ローズは、「この気の毒な人は、最後にはどうなるのでしょうか」**(354)**と言うが、ナンシーは、「前をごらん下さい、お嬢様。あの暗い水をごらん下さい。あの潮の中に飛び込んでも誰も気にしないし、悲し

みもしない、私のような人間のことを、何度もお読みになったことでしょう。何年も先のこともかもしれません。また、数ヶ月の後かもしれませんが、私もついにはああなるでしょう。」(354)と言う。

ここでディケンズがナンシーに語らせている言葉は、具体的には、娼婦の末路として定式化していたテムズ川への投身自殺を暗示している。ディケンズは、*The Chimes* (1844)で投身自殺について取り扱っている。<sup>20</sup> 作品の中、放浪する孤児リリアン(Lilian)になぐさめを与えるメッグ (Meg) であったが、トビー(Toby)は、「その四」でメッグの自分自身溺れ死に、子供も溺れさせて殺そうとする決心を見る。メッグは、子供とともに溺れ死のうとして川を目ざして駆けていく。この場面は、貧乏から死を選んだ母親を描写するだけでなく、売春婦リリアンとも関連性を持たせていることから、売春婦の投身自殺を暗示している場面である。*Oliver Twist*において、ナンシーは投身自殺はしないが、サイクスにより殴り殺されてしまう。殺される前に、ナンシーはブラウンロウ氏とローズが自身に外国で安らかに一生を過ごすように勧めたことを言い、サイクスにも憐れみをかけてもらい、二人で外国に行きもっと善い生活をしようと言う。また、祈りをする時の他は、今までの生活を忘れてお互い決して会わないようにしようと言う。「悔い改めるのに、遅すぎることはない。そうあの方達はおっしゃったわ。一私も今、そう感じます。」(It is never too late to repent. They told me so—I feel it now. (362)) というナンシーの言葉は、彼女の改心が死の間際さらに明白になっていることを示す言葉である。しかし、改心したにもかかわらず、ナンシーが第二の人生を送ることは、サイクスに殴り殺されるがゆえに不可能となる。ディケンズは、サイクスによるナンシー殺害を次のように描写している。

**The housebreaker freed one arm, and grasped his pistol. The certainty of immediate detection if he fired, flashed across his mind even in the midst of his fury; and he beat it twice with all the force he could summon, upon the upturned face that almost touched his own.**

**She staggered and fell: nearly blinded with the blood that rained down from a deep gash in her forehead; but raising herself, with difficulty, on her knees, drew from her bosom a white handkerchief—Rose Maylie's own—and holding it up, in her folded hands, as high towards Heaven as her feeble strength would allow, breathed one prayer for mercy to her Maker. (362)**

ディケンズは、ナンシーの人生が長く悪党団の召し使いとして費やされてきたがゆえに、第二の人生を送ることが不可能であることを示すとともに、誰に仕えたかによって人間の人生が意味のあるものだったか意味のないものだったかが決まることをも示している。それならば、ナンシーの人生は全く意味のないものであったかのかという疑問が残るが、ディケンズはナンシーのような女性の人生が決して無意味でなく救いがあることを示してい

る。

当時、売春がマグダレニズムと呼ばれ、トマス・フッド (Thomas Hood) の「ため息橋」(*The Bridge of Sighs*, 1844)以来テムズ川への投身自殺が娼婦の末路として定式化されていたが、<sup>21</sup>ディケンズは、罪の女であってもイエス・キリストの赦しにより救われることを *The Life of Our Lord* (1934) で示している。*The Life of Our Lord*の第5章において、ディケンズは聖書の物語 (マグダラのマリアへのイエスの赦し) を子供用に脚色している。( *The Life of Our Lord* は、元々ディケンズが自分の子供に読み聞かせるため簡単な言葉で書いたイエス伝である。) パリサイ人であるシモンがイエスが黙ってマグダラのマリアに体を触らせているのを見て、心の中でイエスが彼女を罪の女であることを知っているのではあるかと思うが、イエスが、そのようなシモンに対し金貸しに対する借金の例を持ち出し、借金を多く勘弁してもらったほうが、金貸しに対しより愛するようになると赦しの意味を説く。ディケンズは、この話の後、「私達は、このことから次のことを教えられる。つまり、誰か私達に何か悪いことをしても、やってきてほんとうに悪かったと言え、その人をいつでも赦してあげなければならないということである」 ('We learn from this that we must always forgive those who have done us any harm, when they come to us and say they are truly sorry for it.')22と続けている。ディケンズが *The Life of Our Lord* で説く赦しは、*Oliver Twist* においては、キリストによる救済のヴィジョンとなって我々の前に現れる。

ディケンズと 'fallen women' との関わりにおいて、忘れてはならないのが、ユレイニア・カテージ (*Urania Cottage*) における活動である。これは、アンジェラ・バーデット・クーツ (*Angela Burdett Coutts*, 1814-1906) により設立されたホームレスの女性達の家であり、ディケンズも設立に尽力し、運営に携わった最も支持された慈善事業である。これは、シェパーズ・ブッシュ (*Shepherd's Bush*) の離れの家において 1847 年 11 月に始められ、大きさは 13 人の被收容者と 2 人の管理人を收容できるほどのものであった。ユレイニア・カテージは、1858 年までディケンズの積極的な管理のもとで機能した。この家の目的は、売春や犯罪者層としての生活からの逃避の場所を提供することにより、'fallen women' を救うことであった。[*Urania Cottage* の 'Urania' は、ビーナス (*Venus*) (ローマ神話の愛と美の女神) の形容語句であり、地上の性愛と対照的な 'celestial' 「神聖な」を意味する。]ユレイニア・カテージは、被收容人を以前の関係から切り離し、家庭におけるつとめや宗教における教育を行い、自己修養の手助けをし、植民地に移住することを手助けした。ディケンズは、被收容者になり得る人々に配布するため、*Appeal to Fallen Women* (1850) という文章を書いた。そして、適当な候補者を見つけ募るため、監獄や他の矯正機関を訪れた。<sup>23</sup>このことから、ディケンズが社会的な規範から逸脱した女性でも、更生して第二の人生を送ることが可能であると考えていたと言つてよからう。

ディケンズは、*Oliver Twist* において、悪党達の仲間として長く生活した売春婦であるナンシーのような女性でもイエス・キリストの赦しにより改心が可能であることを示すとともに、オリヴァーの救済に貢献している人物であることを描き出し、ナンシーの人生が意



味のあるものであったことを示し、良心の目覚めがいかにか売春婦の生き方を変えるかを示したと言っているだろう。

## 注

\*本稿は、新生言語文化研究会関西支部第9回研究発表会(於同志社大学、2002年3月18日)での発表原稿を加筆修正したものである。

1 フィールドイング (K.J.Fielding) は、オリヴァーが「善」として普遍化されることについて、ディケンズがコンヴェンションの利用の仕方を知っていたと評価しているが、孤児の高貴な素性が年月を経て判明するという筋立てを借用することにより「善」が最後まで生き残ることを印象づけたと考えられる。

[K.J. Fielding, *Studying Charles Dickens*, 20.]

2 Allan Grant, *A Preface to Dickens*, 96.

3 A.H.Gomme, *Dickens*, 73-4.

4 Brian Murray, *Charles Dickens*, 80.

5 Clive Emsley, *Crime and Society in England*, 153.

6 Charles Dickens, *Oliver Twist*, 62. 以下、引用文は、同書により引用末尾の( )にページを示す。

7 サイクスが語るネッド(Ned)とブレイク(William Blake, 1757-1827)の”The Chimney Sweeper”の死んだ子供ネッド(Ned)が同じ名前であることに注目したい。ディケンズがブレイクの詩を読み、*Oliver Twist*にネッドという名前を使ったと考えられる。

8 ケロウ・チェズニー(著)、植松靖男・中坪千夏子(訳)、『ヴィクトリア朝の下層社会』、172.

9 Brian Murray, *op. cit.*, 82.

10 マイケル・スレイター(Michael Slater)は、オリヴァーをかばう時のナンシーについて、’Nancy suddenly sees in Oliver the image of her own past self.’と説明している。

[Michael Slater, *Charles Dickens our Mutual Friend: Essays From Britain and Japan*, 41.]

11 ブラウンロウ氏は、モンクスにナンシーの変化について第49章で、’The sight of the persecuted child has turned vice itself, and given it the courage and almost the attributes of virtue.’と説明している。

12 Robert Giddings, *Oliver Twist Dramatised by Allan Beasdale*, ITV

November-December 1999. *David Copperfield Dramatised by Adrian Hodges*, BBC-1

Christmas Day and Boxing Day 1999. in *The Dickensian*, 96(2000).69.

13 *Ibid.*, 69-70.

14 Clive Emsley, *op. cit.*, 102.

15 裁判にかけられる女性の訴訟として考えられる主な罪は、売春と関係がある罪であった。売春の罪は、特に売春婦が客を引いたり、道徳的でないかせぎに頼って生活したり、売春宿を経営したりすることであった。[Clive Emsley, *op. cit.*, 153.]

16 Burton M. Wheeler, 'The Text and Plan of *Oliver Twist*, in *Dickens Studies Annual* vol.12., 41.

17 Clive Emsley, *op.cit.*, 153.

18 江藤秀一・松本三枝子（編）、『イギリス文化・文学への誘い』, 205.

エラ・ウェストランド (Ella Westland) は、

**Prostitutes in 19th-century art and literature were sensationally depicted as sexual and sinful whores, the dark opposites of 'angels in the house.'**

**Many ended their wretched careers by drowning themselves in the Thames.**

と述べているが、経済的理由から 10 代後半で売春を行うようになった女性も多かったのである。

[Ella Westland, 'Prostitutes and Fallen Women', in *Oxford Reader's Companion to Dickens*, 468.]

19 『ヴィクトリア朝の下層社会』, 340.

20 ディケンズは、*The Times* において、若い女性の裁判に関する記事を読んでいた。彼女は救貧院への恐怖から赤ん坊とともにテムズ川に身投げした。子供は、母親の腕からすべり落ち溺れた。そして助けられた母親は、殺人罪を問われ、死刑を宣告された。ディケンズは、*The Chimes* において、時事問題として自殺を試みることを罪とすることについて言及している。1841 年に始められたサー・ピーター・ローリー (Sir Peter Lawrie, 1778-1861) の自殺禁止令は、論争をひき起した。サー・ピーター・ローリーは、自殺しようとして失敗した悲惨な境遇にある人達を足踏み車の刑に処すことにより、自殺をやめさせようとした。[Peter Ackroyd, *Dickens*, 465.] ディケンズは、極貧であるがゆえに自暴自棄になる貧乏人の状況を、もっと考慮に入れるべきだと考えていた。

21 トマス・フッドが「ため息橋」で言及している罪は、女性の自殺であり、それは道徳上の罪である。フッドのインスピレーションの源は、1844 年 3 月下旬から 5 月下旬までに詳述されるマリー・ファーリー (Mary Furley) の事件である。ベスナル・グリーン (Bethnal Green) 救貧院の被收容者として一枚 2 ペンス以下でシャツを作ることにより、自身と二人の子供を支えていくことができず、教区により自身と子供が切り離されることを恐れ、この中年女性は、18 ヶ月の下の息子とともにリージェント (Regent) 運河に飛び込んだ。彼女は救われたが、息子は死んだ。被告側弁護団もなく、彼女は殺人と自殺を試みたということで裁判にかけられ、死刑の判決を下された。大衆抗議により、彼女の死刑執行は延期に

なり、ついに減刑になり、7年間の流罪となった。[Susan J. Wolfson and Peter J. Manning, *Selected Poems of Hood, Pread and Beddoes*, 342-3.]

次は「ため息橋」の最初の5連である。この詩から自殺を企てた女性の哀れさが伝わってくる。

*The Bridge of Sighs*

'Drown'd! drowned'—*Hamlet*

One more Unfortunate,  
Weary of breath,  
Rashly importunate,  
Gone to her death!

Take her up tenderly,  
Lift her with care;  
Fashion'd so slenderly,  
Young, and so fair!

Look at her garments  
Clinging like cerements;  
Whilst the wave constantly  
Drips from her clothing;  
Take her up instantly,  
Loving, not loathing.—

Touch her not scornfully;  
Think of her mournfully,  
Gently and humanly;  
Not of the stains of her,  
All that remains of her  
Now is pure womanly.

Make no deep scrutiny  
Into her mutiny  
Rash and undutiful:

Past all dishonour,  
Death has left on her  
Only the beautiful.

22 Charles Dickens, *The Life of Our Lord*, 50.

23 Norris Pope, 'Urania Cottage', in *Oxford Reader's Companion to Dickens*, 577-80.

#### Works Cited

Ackroyd, Peter. *Dickens*. London: Minerva, 1990.

Dickens, Charles. *Oliver Twist*. New York: Oxford UP, 1987.

———. *The Life of Our Lord*. New York: Simon & Shuster, 1999.

Emsley, Clive. *Crime and Society in England*. London: Longman, 1987.

Fielding, K.J. *Studying Charles Dickens*. Harlow: Longman, 1986.

Giddings, Robert. *Oliver Twist* Dramatised by Allan Beasdale. ITV November-December 1999. *David Copperfield* Dramatised by Adrian Hodges, BBC-1 Christmas Day and Boxing Day 1999, in *The Dickensian*, 96(2000).

Gomme, A.H. *Dickens*. London: Evans Brothers Limited, 1971.

Grant, Allan. *A Preface to Dickens*. London: Longman, 1984.

Murray, Brian. *Charles Dickens*. New York: Continuum Publishing Company, 1994.

Pope, Norris. 'Urania Cottage', in *Oxford Reader's Companion to Dickens*. Ed. Paul Schlicke. Oxford: Oxford UP, 1999.

Slater, Michael. *Charles Dickens our Mutual Friend: Essays From Britain and Japan*. Nan'un Do, 1983.

Weeler, Burton M. 'The Text and Plan of *Oliver Twist*', in *Dickens Studies Annual* vol.12 Ed. Michael Timko, Fred Kaplan, and Edward Guiliano. New York: AMS Press, Inc., 1983), p.41.

Westland, Ella. 'Prostitutes and Fallen Women', in *Oxford Reader's Companion to Dickens*.

Wolfson, Susan J., Manning, Peter J. *Selected Poems of Hood, Pread and Beddoes*. Harmondsworth: Penguin, 2000.

江藤秀一・松本三枝子、『イギリス文化・文学への誘い』、開拓社、2000。

チェズニー・ケロウ、『ヴィクトリア朝の下層社会』、植松靖男・中坪千夏子（訳）、高科書店、1991。